

第九十七回日本学士院受賞者略歴

恩賜 日本学士院賞 受賞者 秀村選三



専攻学科目 日本社会経済史

生年月日 大正十一年二月一日

略歴 昭和二年九月 九州帝国大学法文学部経済学科卒業

同 二六年四月 九州大学経済学部助教授

同 四一年四月 九州大学経済学部教授

同 四五年三月 経済学博士

同 五一年六月 九州大学経済学部長（併任、昭和五三年五月まで）

同 五四年六月 九州大学石炭研究資料センター長（併任、昭和六〇年五月まで）

同 六一年四月 久留米大学商学部教授

同 六一年五月 九州大学名誉教授

同 六三年四月 久留米大学比較文化研究所教授

平成 五年四月 久留米大学比較文化研究所客員教授（平成一〇年三月まで）

経済学博士秀村選三氏の『幕末期薩摩藩
の農業と社会―大隅国高山郷土守屋家を
めぐって―』に対する授賞審査要旨

本書は、幕末期の薩摩藩領大隅国肝属郡高山（こうやま）郷（現在は鹿児島県肝付町高山）に居住した上級郷土の一つである守屋家を中心に、当時の郷村や家の生活の実態を、いわば微視的かつ総合的に考察することにより、薩摩藩領農村の具体的な様相を説明するための確実な基礎を提供しようとしたものである。薩摩藩では、藩権力が強大であり、しかも各郷には数百人の郷土が居住する集落（麓）があつて、農民を直接に支配していたため、農民の地位は低く、他地域での農村史料に相当するものは、農民の家にはなく、一面では地主でもあつた郷土らの家に伝存している場合が多い。特に守屋家には、当主による「日帳」（日記）や「耕作日記」など、貴重な史料が多く残されている。他の有力郷土の家に伝えられた史料なども参照しつつ、一つの郷、一つの家の姿を、いわばその内部構造に即して克明に描くことにより、薩摩藩領を説明するための基点（著者の表現では定点観測点）としようとするのが、著者の目標で

あり、そのために必要な限り、既存の研究を展望し、その中に本研究を位置付けることが試みられている。

このような広い視野からの展望は、薩摩藩領の農村を研究対象とすること自体にも指向され、ともすれば「封建制の極北」などと呼ばれて、特殊な地域と見做されがちである薩摩藩を、幕藩体制の中の一類型として位置づけるための試論が最初に述べられている（第一章）。東北型・畿内型・西南型などに、江戸時代の藩を地域類型によつて分類することは、多くの研究者によつて試みられて来たが、著者は「西南辺境型藩領国」として、土佐藩から南九州（薩摩・人吉など）・西九州（佐賀・平戸など）の諸藩を経て、対馬藩と長州藩に至る、円環をなす形のグループを新しい類型として提案する。いずれも戦国以来の旧族大名の系譜に属し、幕藩体制に適合する形態をとりながらも、なお郷土制度を残存させ、藩権力が強大である点などで、共通の構造をもつのである。これはまだ仮説ではあるが、その中に薩長土肥と呼ばれる維新変革を推進した雄藩が含まれていることは注目すべき点で、維新史の社会的基盤という大きな課題の解明のために、新しい道を開いた独創的な発想として注目される。

薩摩藩に関する従来の研究は多いが、第二次大戦以前においては、藩政史や制度史の研究が主であり、郷村の歴史に目が向けられ

るようになったのは、主として戦後のことであるが、しかし残存する史料は乏しく、郷村の実態は必ずしも明らかにされていない。鹿児島県内出身の研究者が多い中で、秀村氏は県外（福岡県）出身であり、それだけに客観的考察をめざして、一郷一家についての徹底的調査に着手した。これだけの豊富な史料があれば、共同研究の形をとる場合が多いが、秀村氏はあくまで単独で、一九五〇年前後に

着手して以来、半世紀を費やしてこの大著を完成したのである。単独の外来者として、現地をよく踏査し、またこの地域に居住する多くの人々に接して、聞き取りをしたり、宿泊の便宜を与えられたりするなど、密接な交流があった。しかし聞き取りをした古老たちの間でも、明治初年生まれの人と明治二〇年ごろ生まれの人との間では、既に記憶が一致しないなど、現地の状況の変容は著しく、しかも古老たちはしだいに世を去った。聞き取りと現地調査とが有効な最後の時期に秀村氏は際会したといえよう。

守屋家は、郷士として各種の役職を歴任し、また知行主として門（かど）の農民から年貢を収取する支配身分に属したが、他の一面では所有地の農事を指揮する手作り地主であった。その農事の記録である「耕作日記」のうち、元治元年（一八六四年）の分を中心に、当時の農業経営の様相が解明される（第四章）。このうち手作りの田一町三反余の約三分の二が実植田であることが注目される。実植

田とは、苗代を立てて真米を育てる植田に対して、赤米を直播きする牟田（むた、湿田）を意味し、その労働の過酷であったことは、古老の記憶によって知られる。畑作の甘薯・煙草なども、ほぼ自給分のみであった。

このような農業を支える労働組織については、やはり元治元年の記録に基づき、日々の労働と、それに従事した人名が詳細に表示され、その主要な部分が下人によって担われていたことが明らかにされている（第五章、第六章）。この労働組織の問題は、他地域の調査などに際しても秀村氏が注目して来た重要な分野であって、精細な分析が行われているが、これを要約することは容易ではない。要するに下人という中にも多様な性格のものが含まれ、永代下人と呼ばれる二戸は、屋敷と開拓地を与えられて、半ば独立の農民となっており、そのほか年季奉公人や日雇いの奉公人など、多様な性格の労働力が、広い意味での親方・子方関係に組み込まれて、守屋家の生業と生活を支えていたことがわかるのである。

そのほか、宗門改の制度とその実態（第十三章）など、本書の論点は多岐にわたっているが、その中でも重要と考えられるのが、親族関係の問題である。本書は日本農村に関するモノグラフとして、著名な有賀喜左衛門氏の『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』（昭和一四年刊）に比肩すべき性格のものと考えられる

が、有賀氏がこれらの調査に基づき、日本農村社会の特性としての「同族」および同族団の理論を導き出したのに対し、秀村氏は「親類中」の関係を重視する（第九章）。同族とは、本家と分家という系譜によって結ばれた集団を指すが、薩摩藩領の郷土層では、武士身分に属するためであって、分家は困難であり、本書の中でも、守屋家で当主の次男を分家させるために、文化二二年（一八一五年）から天保二二年（一八四一年）まで、二六年を必要とし、その具体的な過程が記録に残されている（第八章）。分家の数は少なく、従って本・分家の集団よりも、実際に家の行事、たとえば氏祭（内神様祭、ウツガンサアマツイ）を支えているのは、親類中と呼ばれる集団であって、分家のほか、婚姻や養子縁組によって結ばれたいくつかの家の人々を包含して、女性がいわはその結節点をなしている。同族が、主として男系の系譜によって結ばれているのに対し、親類中は、男系と女系とを区別せず、それだけ女性の役割が重要で社会的地位も高かったと考えられる。「同族」はよく知られているが、この「親類中」も、日本社会の構造を把握するための有力な手がかりとなるであろう。

上記の通り本書は、学界に寄与する所がすこぶる大きく、学士院賞授賞に値するものである。